

フリガナ	エンクバヤル	シャグダール
氏名	Enkhbayar Shagdar	
学位	博士(経済学)	
学位記番号	新大院博(経)第36号	
学位授与の日付	平成18年 9月21日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当	
博士論文名	Economic Transition and Development Challenges: The Case of Mongolia (経済移行と開発の挑戦: モンゴルの事例)	

論文審査委員	主査	教授 佐藤芳行
	副査	教授 小山洋司
	副査	教授 佐藤康行

博士論文の要旨

本論文は、1989年から2004年にかけての時期におけるモンゴルの移行経済の様相を明らかにしようとしたものであり、モンゴルの市場経済移行に伴って生じた経済的諸問題に対してどのように対応すべきなのか、また持続可能な発展がどのように可能となるのかという問題意識から、モンゴル政府の経済政策およびモンゴル経済のパフォーマンスを分析し、またそれらを決定した主要な要因を実証的に分析しようとした研究である。

本論文は、序論と結論を除き7章から構成されているが、その内容は大きく3つに分けられる。まず、モンゴルにおいて新自由主義的政策が実施される過程が詳細に明らかにされる。ここでは、1991年から新自由主義的政策パッケージが実施されるとともに、モンゴルが旧ソ連圏から切断されて世界市場に接合されること、その際、多くの移行経済諸国と同様にマクロ経済的均衡(価格・商業、貿易の自由化)および構造調整=国営セクターの民営化、財政金融制度の改革が行われたことが示され、またそうした政策の結果として生じたインフレーション、モンゴル通貨の減価の進行、旧西側との取引への転換、製造業部門の後退、流動性不足と金融危機の発生・不良債権の増加などの諸困難が示される。こうしたモンゴルの移行政策パッケージは、旧ソ連の崩壊によって財政・金融的援助が突然停止するという事情によって余儀なくされたものであり、あらかじめよく調整された政策パッケージではなかったことが明らかにされる。

続いて、モンゴル移行経済の様相がいくつかの観点から分析される。まず第3章では、マク

口経済分析がなされ、GDP、産業諸部門、個人消費・政府消費支出・貯蓄・貿易（輸出、輸入、純輸出）の1991—2004年の時系列的な変化が様々な側面から明らかにされる。また第4章では、最も重要な産業部門をなし、1991年以降のさらに重要性を増した牧畜業の状況が地域類型、時系列的変化、主要産物、環境問題との関係などを軸に分析される。第5章では、地域間の所得格差が分析され、特に1991—93年の時期に地域間の経済格差が拡大するにいたった要因が移行経済期における産業諸部門の変化と関連づけられて分析される。第6章では、失業と貧困、およびそれらに関連するいくつかの局面が分析される。これらの分析によって、モンゴルが他の移行諸国と共通してかかえることになった諸問題が明らかにされると同時に、モンゴルに特徴的と思われる諸側面・諸問題が指摘される。すなわち、第二次産業の破滅、製造業から第一次産業、とりわけ低所得部門の牧畜業への激しい後退、第一次産業への労働人口の移動、鉱山業（銅、プラチナなど）への依存率の上昇、貯蓄率の相対的上昇にもかかわらず、GDPの低下と海外からの資本輸入の低下によって余儀なくされた投資率の著しい低下、投資の低効率性などであり、これらの諸現象が相互に有機的に関連していることである。

最後に、モンゴルにおける移行経済のパフォーマンスを踏まえた上で、その要因を説明するために資本蓄積と制度の観点からの分析が行われる。まずハロッド・ドーマー・モデルに依拠したサールウォールの開発経済学的手法を用いて、旧計画経済期から現在にいたるモンゴルの資本蓄積の分析が行われ、投資、純輸出と外資の導入、労働生産性、人口または労働力との関係に関する興味深い結論が導きだされている。ついで、政府、立法機関、企業の行動について若干の制度的分析が試みられ、民営化された企業の様々な制約条件が明らかにされる。以上の分析を通して、エンクバヤル氏は、モンゴルの移行経済が、多くの移行経済と同様に、「ほとんどあらゆる形態の新自由主義政策症候群および移行問題」をもたらしたと結論し、それと同時に上記したモンゴルの移行経済の特質と考えられる諸側面（とりわけ投資が労働生産性の上昇をもたらすのではなく、急速に増加しつつある人口を扶養している事実、市場経済に適合的ではない企業行動など）を明らかにしている。

審査結果の要旨

以上のようにまとめられる本論文は次の点で高く評価できる。

第1に、モンゴルにおける新自由主義的なショック療法的移行政策の形成が国内的条件、国際関係の中で説得的に明らかにされていること。

第2に、研究史上、多くの市場経済移行の経験から制度の重要性が指摘されてきたが、本論では、資本蓄積（投資）および制度分析の章、およびその他の箇所、具体的な分析が試みられていること。

第3に、本論の分析と考察によって、モンゴルの移行経済の特質を理解する上で重要と考えられる諸側面、すなわち、経済の牧畜業・鉱山業などを中心とする低付加価値の第一次

産業への後退、対外金融依存、資本蓄積と人口・労働力、労働生産性との関係、労働第一次産品輸出への依存および輸出志向成長戦略下の構造調整などの諸側面が明確にされていること。

しかし、本論文には、次のような課題も認められる。第1に、新自由主義的政策パッケージとその下での経済的パフォーマンスの悪化についてはきちんとした分析がなされているが、市場経済移行の開始から15年以上が経過した現在の時点において、従来の政策に代わるどのような代替的処方箋が現れてきているのかが、きわめて興味を引く主題となってきているが、それについては詳しい分析がなされていないため、本論における分析が若干平板なものになっている。第2に、より具体的には、著者の分析が明らかにした資本蓄積と人口・労働力の増加、労働生産性の上昇との関係、第一次産品型経済構造と金融的対外依存の問題をどう統合的に理解し、展望するのか、著者が「経済発展の持続可能性」を問題関心としているだけに、著者の見解が期待される場所であるが、本論文では考察されていない。

しかし、上記のような課題が指摘されるものの、それらは本論文の価値を決して損なうものではなく、筆者のERINA等における今後の研究活動によって深められてゆくと期待されるものである。

本審査委員会は、本論文がモンゴルの移行経済の諸問題を経済学的な観点から実証的に分析・考察した優れた研究であることを鑑み、博士（経済学）の授与が妥当であるという結論を委員一致でくださった。